法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

現場に立つ

仲程, 昌徳 / NAKAHODO, Masanori

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
38
(開始ページ / Start Page)
285
(終了ページ / End Page)
289
(発行年 / Year)
2012-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008004

Hosei University Repository

現場に立つ

仲程昌徳

屋嘉比さんは、現場に立つこと・現場に立ち戻ること、そして問いかけることをもっとも大切にした研究者だった。最後の著作『〈近代沖縄〉の知識人――島袋全発の軌跡』は、そのことをよく示している。

屋嘉比さんは、問いかける。明治、大正、昭和戦前、戦後を生きた島袋全発にとって、沖縄近現代史は「どのような意味をもったのか」と。その問いかけは、いうまでもなく、全発以後「沖縄に生きる後の世代」である屋嘉比さんの、自分自身への問いかけでもあったはずである。

屋嘉比さんが全発に引かれていったのは、伊波普猷以後の「代表的な論客」であったことにあるが、同時に、大学を京都で終え、戻って以後、終生沖縄を離れることがなく、沖縄と共に生き考え続けた「郷土研究者」であり、歌人であったということにあろう。

屋嘉比さんを引きつけた全発は、「近代沖縄の知識人」として、沖縄をよく生きた魅力的な人物であるが、しかし、その足跡については不明の部分が少なくなかった。

Hosei University Repository

「郷土研究者」たちを取りあげていくのは、思っているほどに易しいものではない。屋嘉比さんも指摘しているように、「基礎資料の未整理状態」に行き会うことがしばしばだからである。不明の点が、あまりに多すぎるのである。

屋嘉比さんは、全発の発表した論考の整理からはじめていく。第七高等学校造士館時代に新聞に投稿した随筆類、京都大学法学部在学中に発表していた論考の掘り起こしをはじめ、「那覇区助役問題」の経緯を調べ上げたことなどそうだが、屋嘉比さんは、そのことを誇ることはなかった。

資料の掘り起こしで、さまざまな問題が眼前に迫ってくることになる。屋嘉比さんは、掘り起こした資料の整理をとおして、全発の論考に見られる影響関係を明らかにしていった。それは圧巻といっていい、手並みであった。

屋嘉比さんは、全発に影響を与えた論考を調べ上げ、多面から照らし出していく。そこには、性急なところがなかった。それは、全発が、明治末に書いた論考を取りあげて「日清戦争以後の日本の言論界の支配的思潮である国家主義思想の流れ」に乗ったものであることを指摘するとともに、「しかし」として「問題はその先にあるように思う。はたして、その時期の国家主義という思潮の中で、全発の言論はどのような特徴をもっていたのか」と、改めて問いを立てていくところからも窺い知ることが出来る。

屋嘉比さんは、全発の思想の特質は「中庸」にあったとしたが、屋嘉比さんも「中庸」を大切にし

Hosei University Repository

ていたのではないかと思える。それのよく現れているのが、戦時下の全発についての論述である。

屋嘉比さんは、戦時下の全発について、彼が翼賛団体に関与したことに触れ、それは見逃すことのできない重要な問題であるとしつつ、関与したということで「戦時下の言動を総否定する考え方はとらない」という。そして、なぜ、そうなったのか、検討したい、という。

そこにも、屋嘉比さんの現場に立つという姿勢がよくあらわれているが、そのことを、より明確に示したのが、東恩納寛惇と全発との「帰属問題」に関する発言をめぐり、東恩納の発言を「全発の心情に立ち入ることがなく、戦後沖縄の指導者の苦悩に思い至るところがない」ように思えると指摘したことだろう。

『〈近代沖縄〉の知識人——島袋全発の軌跡』の特質について、二つばかりあげておきたい。その一つは、伊波、東恩納といった沖縄を離れて東京で「郷土研究」を行ったいわゆる第一世代と、沖縄にいて「郷土研究」を行った全発たち第二世代との間に見られる差違・懸隔という大きな枠組みを取っていることであり、あと一つは、全発の思想を論考でたどり、その心情を短歌で見ていくという方法を用いていることである。

全発を考えていく上で、短歌を無視することはできない。西幸夫という歌人としてのペンネームがあったということでもそうだし、時に応じ折に触れ歌を詠んでいたからである。そして、その歌は、率直な心の声が響いていたのだから。

Hosei University Repository

屋嘉比さんは、その短歌を、実に大切なところで使っていた。その短歌について、一点だけ、元気の間に、話しあって置きたかったことがあった。大きな心残りなので、書いて、おきたい。

全発は、昭和一三年『心の花』一〇月号に「那覇港の軍馬」五首を発表しているが、そのうち三首を引用していた。その中の一首

皇国の　領にし生まれて　けものらも　大み軍に　従い征くも

について、「軍馬を詠んだものか、朝鮮半島から強制連行された軍夫たちを詠んだものなのか、はっきりしない」といい、「仮に朝鮮半島から強制連行された軍夫たちの中国への出征の様子を詠った歌だとしたら衝撃的である。それは、全発が、彼らのことを『けものらも』と詠んでいる点にある」という。

屋嘉比さんが、「那覇の軍馬」連作五首のうちの一首に見られる「けものら」にこだわったのは、全発が、かつて満州、朝鮮半島を視察したさいには、朝鮮人や中国人に「温かな眼差し」をそそいでいたのに、昭和一三年になると、彼らを「けものら」と呼ぶようになってしまっていたことを「示していることになる」からだと。そして、屋嘉比さんは「総動員体制下での全発の姿勢は、日本の植民地であった朝鮮半島から強制連行された軍夫たちを差別する視線から免れておらず、大きく変容して

Hosei University Repository

いる姿が見いだされる」としているのである。

全発の詠った歌に見られる「けものら」は、屋嘉比さんが、「仮に」とした「朝鮮半島から強制連行された軍夫たち」を指しているのではなく、「軍馬」そのものを指していたのではなかろうか。それは、同年六月号『新天地』に発表された斉藤史の「鳥獣」六首の中の一首「日の本に生まれし幸やけものらも大き御戦にしたがいまつる」にならったものであるように見えることでもそうだし、表題の「那覇の軍馬」連作の一首だということでもそうだと思うのである。

屋嘉比さんが、歌の一語を、暗喩としても読めると思ったのは、彼の、植民地に対する深いこだわりから来ている。被植民地の人々によせる強い思いに発している。しかし「けものら」は、深読みですよ、と言ったら、屋嘉比さんは、どう答えただろうか。

それにつけても、と思うことがある。

屋嘉比さんは、何度か、お茶を飲みながらの歓談で、第一志望は国文学科だったのですよ、と口にした。屋嘉比さんが、その志望を果たしていたら、と思うにつけ残念な思いをしたものだが、今は、それ以上に、淋しいだけである。